

新たな貧困調査研究の構想のために

——日本国内の貧困研究の再検討から——

宮内 洋・松宮 朝・新藤 慶
石岡丈昇・打越正行

『愛知県立大学教育福祉学部論集』第62号 抜刷

2014年2月

愛知県立大学教育福祉学部

新たな貧困調査研究の構想のために

——日本国内の貧困研究の再検討から——

宮内 洋*¹・松宮 朝*²・新藤 慶*³
石岡丈昇*⁴・打越正行*⁵

はじめに

本稿は、日本国内における貧困研究、しかもその調査研究に絞り、幾つかの領域に限定した上で文献の紹介と議論の整理をおこなったものである。本稿を執筆したのは、「貧困のフィールドワーク研究会」のメンバー5名であり、本稿は本研究会の成果の一つでもある。本研究会では連名で今後も研究成果を次々と発表し続ける予定であるが、本稿はその第一弾となる。

この「はじめに」では、本稿の構成とその概要について述べる。

まず、1節は、石岡丈昇によって、貧困研究の方法の再検討がなされている。本稿の基本的な考えを示したものである。日本ではまだ深くは浸透していないH.ガンズの貧困論から、既存の貧困研究に対して再考を迫っている。

次に、2節は、1節を受けて、この「はじめに」の筆者でもある宮内洋が、具体的な貧困調査について論じた。日本国内の貧困調査に限定し、その調査者本人について言及している。とりわけ、国内の貧困調査の起点となる調査から、これからの貧困調査において重要な視点を抽出するように努めた。

3節は、打越正行によって、若者と貧困について論じられた。中でも、打越が「地元つながり」と呼ぶ、若者のネットワークについて焦点化し、その暴力との関係性が指摘された。

4節は、新藤慶によって、子どもの貧困について、教師とのかかわりという側面から論じられた。既存の研究が「学校による排除」と「学校における排除」という二つの視角から整理され、貧困世帯の子どもが排除されない方向性も示唆されている。

最後の5節は、松宮朝によって、地域と貧困について論じられた。特に、公営住宅が焦点化され、既存の地域社会研究が整理されている。そこでは、現代日本社会において、公営住宅に貧困層が結果的に集住していく様が描かれている。

以上が、本稿の構成と、各節の概要である。本稿が、国内の既存の貧困研究の正当なレビューであるとは言えないだろう。偏りがあることを自覚している。だが、各メンバーの社会調査とフィールドワークの経験に基づいて生み出された、文献研究とは異なる、もう一つのレビューとしての意味を持つものだと思う。（宮内）

1. 貧困研究の方法の再検討

1-1. 「無関心」から「誤った関心」へ

貧困研究で繰り返し登場する言動の型がある。それは社会を構成する大多数の者にとって貧困が「みえない」ことが問題だというものだ（たとえば、青木編 2003）。そこでは貧困を可視化することが学術的基礎作業であるとされる。反貧困運動においても、貧困の最大の敵が「無関心」にあると述べられ、社会問題として関心を引くよう運動を牽引していく必要が論じられる（湯浅 2008）。「みえない」貧困、「無関心」の貧困、こう主題を設定すれば、次に登場する論理は明らかだ。「貧困を発見しなければならない」というそれだ。こうして、先進国における「みえない」貧困が、幾度にもわたって「再発見」されることになる——貧困研究の言動の型とはこのようなものだ。

西村貴直『貧困をどのように捉えるか——H.ガンズの貧困論』（2013）は、この型を打ち壊そうとする

好著である。西村は、この著書の最後の段落でこう書き付けている。

だが、人々の「無関心」が貧困の「最大の敵」であったのと同様に、あるいはそれ以上に、貧困に対する「誤った関心」もまた、われわれが克服すべき重要な課題であるといえるだろう。

(西村 2013 : 334)

西村によれば、人々には貧困が「みえない」のも、「無関心」なのでもない。むしろ、貧困はみえているし、関心が注がれているのだ。問題は、その関心が「誤った関心」であることであり、その誤りの具合に対して批判的に対峙することこそが、貧困研究には求められている。

この問題意識より西村が救い出すのが、ハーバート・ガンズである。ガンズは、日本では『都市の村人たち』の著者として有名で、都市社会学の領域で研究が紹介されてきた社会学者である。しかし、ガンズは都市社会学と同時に、公共政策の分野でも40年以上にもわたり研究を続けてきたのであり、そのなかで一貫して探究しつづけてきたのが貧困根絶のための政策研究だった。西村は、貧困に対する「誤った関心」が増幅される現代日本の状況を念頭に置きながら、ガンズの貧困政策研究に光を当てるのである。

本節では、この西村の著書を取り上げ、そこから貧困研究を刷新するための方法について考えてみる。なかでも、西村が主張している、①貧困の概念の反省的分析、②経済問題ではなく政治問題としての貧困、③貧困の積極的機能、という三点に注目して、この著作を跡づけていきたい。

1-2. 貧困の概念の反省的分析

貧困の概念に関する研究とは、「貧困者がどのような人々として記述され、貧困が社会の中でどのようなかたちの『問題』として構成されているか」(同 : 10)を中心に考察することである。その際に注目するのは、「貧困とは単に客観的な状態を指す用語ではなく、それ自体のなかにある種の道徳的価値判断が含まれざるをえない」(同 : 12)点である。社会のなかに貧困が「ある」ことを認識した人はそれを克服する手段の導入を呼びかけるだろうし、逆に「ない」と認識することは現状を肯定する立場に立つことになる。そうである以上「貧困理解や対貧困政策をめぐる見解の相違は、様々なかたちの政治的な対立軸を構成させる」(同 : 13)。

このように述べる西村が研究に要求するのは、次のような反省的営為である。「貧困についての研究を志す者は、自らが採用した貧困の概念と、実際に導入された対貧困政策のなかに織り込まれた貧困概念との『距離』に関して、厳しく自覚的でなければならない」(同 : 14)。この点から、西村が現状批判するのは、「フリーター」「パラサイト」「下流」「ゆとり(世代)」といった用語群である。「結局のところこれらの用語や言説は、質的に異なる多様な問題を、すべてその当事者の『道徳的欠陥』の問題に矮小化する」(同 : 330)。

貧困の概念に着目する西村の議論のポイントは、貧困を記述するという営為自体に支配的道徳が滑り込んでしまう事態である。「貧困に関する研究は、それ自体のなかに既存の社会体制や制度のあり方に対する何らかの異議申し立てを含まざるをえないことから、貧困について偏見なく客観的に論じようとする試みはほとんどうまくいかない。それゆえ貧困についての研究を行う者は、自身の有する価値観や政治的志向性と無関係にその研究を進めていくことはできない」(同 : 114)のだ。西村が貧困の概念にこだわるのは、自らの価値判断を含んだ貧困の概念と、その概念によってなされた記述の関係様式を捉えようとするからである。概念の傾きを自覚した上で、その概念によって達成された記述を捉えることで、支配的道徳に絡みとられない調査実践を遂行しようとするのだ。

1-3. 貧困の脱政治化という政治

貧困を記述する際に支配的道徳と直面することは、貧困が経済問題を超越して政治問題の範疇にあることを示している。貧困をめぐる政策談義は、誰が「救済に値する貧困者」で誰がそうではないのかという選別をつねに隠し持っている。その際に「意欲」や「モラル」を備えていると多数派にみなされる者は救済の対象となり、そうではない者は切り捨てられる。こうして貧困をめぐる議論は、貧困者を道徳的に監視する政治問題へと向かう。西村が言う「誤った関心」の一端とは、多数派が貧困者にむけるこの道徳的関心にあると言えよう。

西村はこの道徳的関心をめぐる典型的事例として、アメリカのアンダークラスの議論を取り上げている。西村はチャールズ・マレーの「貧困者には二種類の人々が存在し、単に所得が低いだけの人々と、彼ら自身の行動によって定義される人々」がいるという記述

を引用する（同：267）。アンダークラスとは、単に低所得なのではなく、主流的価値観を共有せず逸脱行動を繰り返すことによって貧困に陥っている人々を指すとされるのだ。このアンダークラス概念は、アメリカで広く受け入れられ、貧困を社会的に無くそうとするのではなく、貧困者を懲罰的に追放しようとする当事者叩きへとつながっていった。こうした状況に批判的に対峙したのがガンズであり、『『貧困との戦争』とはまったく逆の方向、すなわち『貧困者との戦争』がエスカレートしている』（同：285）と指摘したのである。西村はアンダークラス論争におけるガンズの立場を擁護しながら、次のように端的にまとめている。

アンダークラス概念を用いて言及されることによって、その人々の行動に関する逸脱的側面のみが強調され、最も根本的な問題であるはずの、彼らの経済的な意味での貧しさやその改善策に関する政治的検討課題は背景に退いてしまう——「脱政治化」される——のである。（同：284）

貧困とは「我らの社会」が内包する問題であり、困窮する「彼ら」の問題なのではない（同：327-9）。しかしこの問い方が封印され、貧困とは「彼ら」の問題であって、「我ら」の問題ではないと論じるあり方自体に、貧困問題の核心があると西村は言う。こうした貧困の問い方——「彼ら」の問題としての封じ込め——を正当化する道具として、アンダークラス概念は位置づいているのである。「我らの社会」が内包する問題を「彼ら」の問題へとすり替える手法のことを、西村は「脱政治化」と呼んでいるのだ。

1-4. 貧困の「積極的機能」

貧困者を道徳的に監視し、それを追認する似非科学的概念を発明し、「我らの社会」の内包する問題を「彼ら」の問題へと矮小化——脱政治化——する。このようなメカニズムを西村はガンズに倣いつつ暴き出した上で、さらに議論を展開する。そこでの問いは、貧困を「彼ら」の問題へと封じ込めることによって、いかなる利益を多数派の側が得ているのかという点である。すなわち、社会体制を現状維持する上で、貧困を放置しておくことには「積極的機能」があるはずだと問うのである。

ガンズが貧困の「積極的機能」として提示した論点は数多く、西村はそれらを列挙しているが、そのなかでも筆者から見て重要と思われるのは、貧困を放置することの「社会文化的機能」および「政治的機能」で

ある。

「社会文化的機能」として、「貧困者は、支配的機能の逸脱者として同定され、非難されることによって、その時点で支配的なものとなっている規範の正当性を擁護する積極的機能を果たしている」（同：234）。働くことの大切さを説くためには、働かない人が実際にいて彼らの末路がいかに悲惨かを示すことが必要である。そうして、貧困者は「非難されることを通じて、当の社会規範や秩序の正当性を再生産することに貢献している」（同：235）。

この点は「政治的機能」とも関係する。「貧困者が道徳的に劣った人々であると言い立てられることによって、既存の政治経済体制に課せられている貧困根絶への道徳的あるいは政治的圧力が軽減される」（同：240）。貧困者を道徳的に糾弾することで「特定の人々が不利益を被っている既存の社会・経済構造を、政治的に正当化することに役立つことになる」（同：295）のだ。

脱産業化時代の今日の貧困者は「役割もなく、他の人々に対して有益な貢献も行わず、原則として救済の対象の枠外にある」（Bauman 2008: 137）。にもかかわらず、「実際には様々なかたちの積極的機能を遂行し、既存の社会編成を再生産するシステムにしっかりと組み込まれている」点を西村は強調する（西村 2013: 296-7）。

1-5. 貧困調査の可能性の条件

以上、貧困研究をガンズを援用しながら刷新しようとする西村の議論を追いかけてきた。西村に倣うならば、貧困研究は「みえない」貧困の実態を調査して、その「再発見」を繰り返すのではなく、そもそもの調査の可能性の条件をこそまずは検討すべきだということになる。それはさしあたり、貧困の概念の検討であり、貧困者への道徳的関心という「誤った関心」を切断することであり、貧困の「積極的機能」の遂行に加担している非貧困者をも対象として貧困調査を構想することになるだろう。西村の著作が教えてくれるのは、貧困調査の手前で、そもそもの調査の可能性の条件を問うことの重要性である。（石岡）

2. 貧困調査における調査者のリフレキシビティ (reflexivity)

2-1. 日本社会を対象とした貧困調査の起点

前節で述べられているように、近年の貧困に関する

実証研究の領域においては、「貧困」は発見の対象として存在しているかのようだ。それは、現代日本社会においては、貧困が可視化されていないという前提が共有されており、だからこそ、各地域・各領域に潜む貧困を探し出さなければならないというモチベーションが生まれてくるのかもしれない。

近代以降において、可視化の試みとしての初発の一つとしては、東京と大阪の「貧民窟」を訪れた桜田文吾の『貧天地饑寒窟探検記』を受けて、1893（明治26）年に出版された松原岩五郎による『最暗黒の東京』が挙げられるだろう（松原 1988）。松原岩五郎が描き出したのは、日本国における第一次産業革命前夜の東京の下層社会と言えるだろう。その後、1899（明治32）年に出版されたのが、貧困調査研究の起点として紹介されることが多い、横山源之助による『日本の下層社会』である（横山 1985）。貧困層の生活を自らの取材に基づき描いたルポルタージュであり、第一次産業革命以降の近代の労働者における貧困が描かれている。その後、よく知られるように、草間八十雄や今和次郎の調査結果などが次々と世に出されている。

このような初期の貧困研究の調査の試みについて、「都市へのまなざし」として読み解いたのが西澤晃彦である（西澤 2000）。西澤は、「近代になっての急激な都市への人口移動は、都市に住まう特権階級（中略）の『今、私がいる世界』についての認識を危機的なものにした。（中略）特権階級からすれば、この貧しい人々の巨大な群れは解読不能の存在としてあった」とし、そこに生じた社会的な距離によって、『『危険な階級』としてであれ、『慈善の対象』としてであれ、あるいは『革命の担い手』としてであれ、彼ら彼女らを可視化し、把握し、手をくだそうとする欲望を特権階級に喚起』させることになり、「研究者、社会事業家、ジャーナリスト、革命家たちは、知的というにはあられもない可視化の欲望を膨らませた」（西澤 2000：30、字体も原文のまま）と論じる。世界的な大都市であったロンドンでのC. ブースの都市調査も、アメリカにおけるシカゴ学派の一連の都市エスノグラフィもまた、その「可視化の欲望」の産物であったというわけである。この可視化の欲望は、種々の感情を伴いながら、現在もなお喚起されたままなのかもしれない。

ただ、近代から現代に至るまで、貧困は都市のみに限定された問題ではない。宮内（2012）で強調されているように、かつて農村部では貧困によって多くの人

たちが亡くなり、そして新生児の命が故意に絶たれていた。それらの実態については、宮本常一たちによって『日本残酷物語』としてまとめられている（宮本ほか 1995a, 同1995b）。本節では都市部のみに言及しているが、宮本らの文献で描かれているような非都市部での貧困による困窮の惨状は忘れてはならない。そして、非都市部の貧困の描写もまた「可視化の欲望」が背後に存在していた可能性も改めて考えなければならないだろう。

2-2. 貧困研究初期の調査者たち

西澤晃彦による「都市へのまなざし」という視点に沿って、貧困研究における調査を概観したが、次に、生身の調査者自身の各々のまなざしについて考えてみたい。

上記の起点となる各々の貧困調査における調査者であった松原岩五郎と横山源之助、そして草間八十雄の調査当時の肩書きは全員が新聞記者であり、ジャーナリズムの観点から貧困層の生活をその内部から外部に伝えようという意思があったと思われる（作家としての表現の欲望もまた持ち合わせながら）。その後、草間八十雄は東京市職員（現在の東京都職員）に転じるが、この時期の貧困に関する調査はジャーナリズムのみならず、自治体によっても進められていた。それは、西澤晃彦によってなされた上記の説明のように、たとえ未知なる集団（それらが結束した集団ではなく、バラバラの存在であったにせよ）に対する特権階級側の恐れから生じたものかもしれない。しかし、自治体側の調査者であっても、実際に浮浪者の世界で生活し、その存在に同化しながら、その世界を参与観察し続けてきた、「ほくろの旦那」こと草間八十雄は、貧困は本人自身の能力の欠如などが原因ではなく、大半が社会の側の問題だと明言するに至っていることも一方で記しておかねばならないだろう（草間 2013）。

同時期の貧困研究における調査は、ジャーナリストや自治体のみならず、研究者によってもなされている。その一人として、今和次郎が挙げられよう。柳田國男の弟子であった今和次郎は、東京美術学校（現：東京藝術大学）卒業の画力を活かして、柳田國男の調査を支えていた。今和次郎は貧困層の風俗のみならず、富裕層が闊歩する銀座における風俗もまた調べることによって、まさに細かな画力による比較の試みも構想していた。ジャーナリストではなかった今和次郎は、研究者としての自覚を胸に抱き、東京の「貧民

窟」の調査に臨んだと思われる。当時の今の記述が興味深い。

私たちは最初の日以来、服装にも表情にもその地方色に同化するよう努めて、つぎの日からこれらの人たちに眼をみはらせるようなへまはしませんでした。もののみつめ方、歩き方、さらには根底的である、すべてのことに冷淡であること、……それらの事項を学んで実行してみました。

(今 1987 : 170-171)

現在のジャーゴンに換言して説明するならば、フィールドにエントリーした初日に、今和次郎たちはフィールドの人たちとは明らかにかけ離れた身なりと言動をしていたために、非常に目立ってしまったのであろう。今和次郎が書く「へま」とは具体的に何を意味するかはきわめて興味深い今日的な問題である(「冷淡」とは何を意味するかも含めて)。今和次郎のこの短い記述から、周囲の人たちの言動を注意深く観察しながらも、自らの言動もまた振り返るという態度が読み取れる。貧困研究初期の時点においても、貧困研究における社会調査においてはきわめて重要だと思えるリフレキシビティが調査者に息づいていたのである。

2-3. 貧困調査における調査者自身の実感と リフレキシビティ (reflexivity)

社会調査に基づく貧困研究を読み進めると、生活困難層の子どもたちの語りを、貧困に基づく言動という観点から解釈していたが、筆者には生涯発達における思春期の特性としても理解する必要があるように思えたことがあった(例えば、久富編 1993)。また逆に、筆者は臨床の場にも携わっているが、精神的な病の発露であると診断されていた言動が、実はフィールドワークによって当人の生活を調べると、当人の生活の場においては非常に理にかなった言動であり、その反復として現在の様相があるということも十分に起こり得る。

貧困研究においては、現実とは乖離した「貧者」を想定し、自らの常識をまったく疑うことなく温存したまま、イメージそのままの「貧者」を描き続けたり、あらゆる事象の原因をすべて貧困に委ねて説明するなどの行為を研究者は知らず知らずのうちにおこなってしまうことに注意しなければならない。

そのためには、上記の今和次郎の記述にもある生身の調査者自身の実感とリフレキシビティが重要となるだろう。紙幅の関係で詳細には展開できないが、一部

の社会調査とフィールドワークは、ポルナーが述べる「成員がある社会的リアリティの中で、そのリアリティに対し、またそのリアリティについて行っていることがいかにして当の社会的リアリティを構成しているのか」を明らかにする。これらは「内生的リフレキシビティ (endogenous reflexivity)」と呼ばれたが、重要なのもう一つのリフレキシビティである。つまり、分析者も含めた上でのリフレキシビティ、「自己言及的なラディカルリフレキシビティ (referential radical reflexivity)」である (Pollner 1991)。好井裕明は、後者のリフレキシビティの重要性を述べ、「『私』をも巻き込んだ錯綜したリアリティの“螺旋運動”のなかで、それ自体を詳細にかつ執拗に見ていく「ラディカルなエスノグラファー (a radical ethnographer)」であるべき」と説く (好井 1994 : 100)。これらはエスノメソドロジーの文脈であるが、貧困調査においても非常に重要な点である。

その一例は、先に示した貧困調査初期の松原岩五郎の記述にも見出される。取材のために「貧窟」の木賃宿に泊まった松原は、その不潔さを中心に細かく描写している。宿泊した夜に、蚊、蚤、シラミによって意識朦朧となりながらも一睡もできず、朝になり「表口の開くや否、驀然に飛び出して新鮮なる大気を呼吸し、八方駆け廻りて僅かに堀井戸を見出し、そこにてようやく釣瓶顔を洗いけり」と記し、野宿のほうが快適なのではないかと考える。それは、虫のみならず、臭気や熱波なども含めた環境によって眠ることができなかった松原の実感である。しかし、ここで松原は「鬼の如き腕を持ち、鋼のごとき身体」を持つ肉体労働者たちが「三度の食事を省き、着たき衣物を買い得ずして毎夜三銭ずつの木賃を払う」のはなぜかと考えた。たとえ松原にとっては一睡もできないような環境であっても、彼らにとっては天然の寝床は風流などではなく、蛇や蛙や蟻から逃れ、身体の疲労を回復できる「最後の安眠所」であることに気づくに至ったのだ (松原 1988)。

阿部彩を筆頭に、日本社会を対象とした貧困研究において、質の高い量的調査が増えており、様々な発見がなされ、重要な指摘がなされている (阿部 2008)。一方で、貧困調査の起点として述べたような、生身の自らの身体を用いた実感を重視した調査は、近年では本稿の著者の一人でもある打越正行のエスノグラフィ (打越 2011a) などが出されているがまだまだ少ない現状である。

さらに、阿部彩 (2008) が指摘するように、日本社会は絶対的貧困ではなく相対的貧困の激増という状況にシフトしているならば、上記のような「貧窟」ではなく、多様な人たちが混在する空間を、貧困を研究する者がどのように見るかという問題がこれからは重要となるだろう。本節の冒頭に述べた貧困の可視化の問題は、貧困が可視化されていないのではなく、調査者のまなざしが鈍ったために見えないとも考えられる。私たちの日常生活から貧困は徹底的に覆い隠されているので曝かなくてはいけないのか、もしくは日常生活の中の貧困の痕跡や断片を私たちは気づくことさえできなくなっているのではわざわざ探しに出かけなくてはならないのか。貧困調査の前に、調査者自身がまず立ち止まって振り返る必要があるだろう。(宮内)

3. 若者の貧困——地元つながりに注目して

3-1. 日本の若者の貧困

2012年の UNICEF の統計によると、日本の子どもの貧困率は14.9%であり、ほぼ7人にひとりが貧困状態にある (UNICEF 2012)。OECD に加盟する先進諸国の平均は、11.2%であり、この数値は高いといえる。そのような数値に加えて、日本社会における「飢餓=貧困」とみる貧困観や、生活保護不正受給問題や給食費未納問題に顕著な「自己責任論」は日本社会の貧困をみる際に欠かせない傾向である (後藤 2009)。このように、日本社会は貧困が見えづらく、個人にその原因を押しつける社会であることが指摘されてきた (湯浅 2008, 湯浅ほか 2009, 阿部 2008)。また生活史調査にもとづいた先行研究でも、生まれた家庭で、経済資本や文化資本、そして社会関係資本を著しく欠くことで、「その人生のあり方や展望の、選択の自由と幅が制限される」(大澤 2009: 124) ことが指摘されてきた。そしてそのような若者の多くは、学校や家庭、地域、安定的な就労世界から自ら距離をとっていく。またここでは詳しく扱えないが母子家庭などの家庭的背景も検討すべき重要な要因である。それらの制限によって、貧困層の若者は「生活は不安定であり、先の見通しが立たないことで、常に状況対処的に過ぎざるをえない」(大澤 2009: 130) ことも指摘されている。

このように日本社会でも、最近貧困、なかでも若者の貧困が社会問題として、徐々にクローズアップされてきた。ただしその蓄積はいまだ不十分である。よって、以下では偏りを自覚しつつ、日本の若者の貧

困に接近する際に重要と思われる視角を提示することを試みたい。

3-2. 地元つながりへ

若者の貧困を議論するにあたり、まずは若者に固有の困難についてみておく。芹沢俊介は、「生まれてくる子どもは、自分が生まれてくるべきか否かを考えたり選んだりすることができない。また生まれてくる子どもは、自分を生む親を誰にすべきかを選ぶことができない」(芹沢 1997: 21) とその困難さについて述べる。この選択不可能性を、ここでは若者であることの特性として位置付けて以下の議論に移る。

上の芹沢の指摘に倣えば、子どもは貧困家庭に生まれても、それを拒否することなく引き受けて生きざるをえない。また貧困家庭に対するまなざしの厳しい社会で、若者らはその現状を受け容れながら、各ライフステージにおいて成長する選択肢しか存在しない (宮内 2012)。就労世界への移行でそれらを和らげたり回避したりすることも一部可能であるものの (本田 2007; 中西・高山 2009)、転職や失職を繰り返さざるをえない若者にとっては地元つながりといわれるインフォーマル・ネットワークの形成が重要となってくる。暴走族やギャルサーといったサブカルチャーはその一例である (打越 2011b, 與那覇・新谷 2008)。貧困状態にある若者らが集う地元とそこでのつながりは、かれらが貧困状態をどのように生きているのかをみる際に有効な視点である。今までに貧困状態にある若者が直面する困難さを乗り切る過程に、かれらのつながりがどのように機能しているかに注目する先行研究は一部ではあるが存在してきた。それらの研究は、かれらのつくりだすつながりが、具体的な仕事にアクセスする資源となる様子や (部落解放人権研究所編: 2005)、移行の危機を乗り切っていく情緒的安定の基盤となっている様子 (新谷 2002, 乾 2013) を描いている。そこでは困難に直面する彼らが、相互扶助関係を温情的に形成するありようが描かれてきた。

3-3. 暴力と性の地元つながり

ただしそのつながりが必ずしも温情的なものであるとは限らない。それは往々にして暴力や性を内包するものである (打越 2013)。かれらの多くは上述の諸資本を欠くことに加えて、学校で習得するものとは異なる独自の言語を習得し用いている。生活のための資源はもちろん、発達段階にあるかれらは自らの存在を承

認してもらおうことが欠かせない。そして承認欲求を満たすための言語を自ら習得し用いる困難さに直面するかれらが、暴力や性を介して、お互いにつながり、承認しあうことは必然でさえある。そこでは暴力や性によって困難に直面することもあるが、同時にそれらを介在することで、相対的に安定したつながりが形成されている。例えば、年齢規範や男女関係における権力関係において、先輩や男性は後輩や女性からさまざまな資源を搾取するわけだが、後輩や女性の資源を完全に枯渇させることなく継続的に搾取できるような方策がとられている。ここに温情的ではない、暴力と性を内包する、かつ解体にむかわないつながりのありようを確認できる。そしてこの暴力と性を内包する世界に生きることで、一部の若者は暴力と性を飼い慣らすスキルを獲得し、暴力と性が支配する地元つながりから、「卒業」してきたこともまた事実である。

もちろんこの議論にはいくつか留意が必要である。1つ、これらの暴力と性を内包した地元つながりは時に制御不可能でさらなる弱者への強烈な暴力や性的な搾取となることもある。2つ、この地元つながりは本質的なものではなく、日々の相互行為によって修正を施されながら再生産されるものである。むしろそうであるがゆえに、暴力と性は地元つながりのなかである程度制御され、時には縮小されてもいる。手当たり次第なんの規範もなく暴力をふるう先輩や、女性を性的に搾取する男性は、地元では生きていけない（打越 2013）。その内発的なメカニズムに注目することは示唆に富む。

3-4. 下層労働市場と地元つながり

このような地元つながりの内発的なメカニズムを確認しつつも、それは独立して存在しているのではなく、外部社会、特に下層労働市場の影響を免れることはできない。昨今の労働市場の再編（Bauman 2000＝2001）は、流動化と個別化によって特徴づけられるが、その影響は下層労働市場にも及んでいる。例えば、建築現場では新参者の入れ替わりが激しく、暴力の捌け口は10代の新参者だけでなく30代の半熟練の従業員にまで及ぶようになった。また継続的に搾取される後輩の「使いパシリ」は、先輩から働いた見返りが与えられたり、またいつか搾取する側になったりする部分的な交換関係が前提とされずに、ただ単に使い捨てられるようになりつつある。このように下層労働市場の疲弊によって、「暴力と性を介した継続的な搾

取関係」は、若者の貧困を緩和するどころか、それをより困難な状況に導いてもいる。ここに暴力と性にまみれながらそれらを暗黙の裡に制御する地元つながりから、単なる暴力と性的搾取に溢れた制御不可能なつながりへの変容を読み取れる。

そしてここで地元つながりは、抵抗の拠点でも、緩衝点でもなく、昨今の労働市場の再編を下から積極的に支える役割を担う。それは、貧困層の若者を業種や能力によって細分化したうえで序列化し、その序列を整理し固定化して、大量にストックしている。そして、その配分のメカニズムは地元への距離と態度によって方向づけられる。つまり、労働市場の再編を進めるただ中で、貧困を生きる若者は地元つながりによって、建築業界をまわすための労働力、違法風俗業、キセツ労働力、無業者へと一定の割合で確保する再編の様子を読み取れる（打越 2011b, 2013）。貧困層の若者らの労働市場における再編成とは、全体的貧困化ではなく、マイクロなつながりや、そこでの相互行為を通じて、貧困状態にある若者を下層労働力として、細分化、序列化、固定化することである。そしてそれを進めるのは市場ではあるが、実行するのは市場から「外部委託」された地元つながりによってである。昨今の下層労働市場の疲弊により、地元つながりはこれまでのように貧困状態を緩和するだけではなく、それらを積極的に下支えする両義的な役割を担っている。若者の貧困を掴むためには、このような地元つながりの両義性に注目する必要があるだろう。

3-5. 小括

ここまで日本の若者の貧困の実態、それに対してかれらがどのように生き抜いているのかを地元つながりに注目してみた。そこでは見落としがちであった、地元つながりが暴力と性を飼い慣らし、成員を「卒業」させる内発的なメカニズムをみた。ただし、それは下層労働市場の影響を免れない点も確認した。本来、それは流動的で個別的であるが、それを地元つながりにおけるもうひとつの秩序で緩和していたものが、むしろそれを下支えする様子に地元つながりの綻びも確認した。このように日本社会における若者らの貧困をみるには、(1)暴力と性の問題は避けることはできないし、(2)それがやりとりされるローカルな文脈は外せない視点である。貧困を生きる若者たちの現実を直視し、そのダイナミズムを捉える貧困研究の蓄積が求められる。（打越）

4. 子どもの貧困と教師

4-1. 「学校からの排除」と「学校における排除」

貧困状態にある子どもは、学校による排除を経験することが少なくない。その「学校による排除」は、「学校からの排除」と「学校における排除」として把握できる (Ridge 2002=2010)。「学校からの排除」は、学校に通えない状態を指し、不登校や、奨学金制度の不備 (青木 2007) などによってもたらされる。一方、「学校における排除」は、「勉強がわからない、教師との関係がうまくいかない (中略)、仲間関係で肩身の狭い思い」 (西田 2012: 198) をするといったことを指す。

戦後の「子どもの貧困と教師」研究は、「学校は、貧困層の排除と包摂の両方を果たす機関である」 (上間 2009: 140) ことを明らかにしてきた。そこで、本節では「子どもの貧困と教師」研究を、「学校からの排除」と「学校における排除」の2つの視角から整理してみたい。

4-2. 教師を介した学校における排除

戦後まもなくの子どもの貧困は、長期欠席といった「学校からの排除」を招いていた (佐藤 1957: 79)。また、「学校からの排除」を克服しても、「学校における排除」が待っていた。たとえば、小学校教師が記した学籍簿を分析した籠山京は、「教師の目に映る社会態度・生活態度が、一般 (家庭の児童) と (生活) 保護及貧困 (家庭の児童) ではまるで違っている (中略)。保護及び貧困では『友だちなく一人ぼっち』、『暗い性質』、『乱暴』、『消極的』といった記録が特に多い」 (籠山 1953: 25、括弧内は引用者) ことを指摘している。

一方、小学4・6年生に「先生にしてもらいたいこと」を書かせた作文を分析した三宅和夫は、俸給生活者世帯の子どもは、「学校の中でよく勉強をしないものとか、さわがしいものとか、規律を乱すものとかを指して」「もっとしかってほしい」と要望し、工員や日雇世帯の子どもたちは、「自分をしからないでほしいとのべている」 (三宅 1957: 21) こと、高階層の子どもの方が学習に対して熱心であり、理解度も高い傾向が見られること (三宅 1957: 22-4) を明らかにした。ここからは、「学校からの排除」は解消されても、貧困世帯の子どもは学校生活への適応の程度や学業成績が低く、教師から叱られる対象になりやすいことが示されている。

しかし教師は、学校における貧困層の子どもの排除には自覚的でないことが多い。杉村宏がいうように、教師のなかには「社会階層で子どもを区別・選別する考え方を持ち込むことは適当でない」 (杉村 1988: 17) との考えが根強く存在する。また、盛満弥生は、『「特別扱いしない」学校文化』と「差異を見えなくするための『特別扱い』」の2つの学校文化によって貧困が不可視化されるとする。前者は、「経済的に厳しいからと言って学校から何かすることはしない」 (盛満 2011: 284) という対応であり、後者は、貧困世帯に暮らす生徒が、そのことを周囲に悟られないようにするために教師が部活の遠征費や弁当代をポケットマネーから出すといったものである (盛満 2011: 285-6)。さらに、教師の貧困への関心の乏しさについては、藤本・制度研編 (2009) も指摘する。

一方、この学校における排除が、「包摂」の過程を経ていることを明らかにしたのが久富善之 (1993) である。久富は、教師たちが生活困難層の子どもに対し、家庭で獲得できていない規律を善意で身につけさせようと、学校文化への「包摂」を目指してペダゴギックに関わる結果、かえって子どものつまづきを誘発していることを指摘する。このように、「学校からの排除」の後に待ち構える「学校における排除」は、教師によることが少なくない様子が浮かび上がる。

4-3. 学校における排除の揺らぎ——教師のリフレクション

ただし、貧困世帯の子どもへの関わりは、教師に反省を促す場合もある。たとえば、高知県が長欠対策のために、戦後間もなくから1970年代まで配置した福祉教員を分析した倉石一郎は、ある福祉教員が「私はよく、休んでいる子ども、そしてその親たちにあうために、浜の木陰で網の上がるのを待ちました。その働く姿を目の前に見て、あすからは学校へ来いとは、どうしても言えませんでした。それよりもむしろ、福祉事務所 (長浜支所) へ走って、生活扶助をもらう手立てをする仕事の方が多かった」 (倉石 2009: 195) と回想したことを紹介している。

また、川村光は、1970~80年代の「荒れ」た時代の中学校を経験した教師のライフヒストリー分析で、「怖い」「偉い」という「制度的権威」に則って生徒指導を行ってきた教師が、被差別部落を校区に持つ中学校に異動した途端、生徒の差別への思いをすくい切れず、生徒指導に行き詰まった事例を掲げている。この

ことを反省した教師は、子どもとの信頼を重視し、保護者とも協力することで「人格的権威」を獲得し、生徒指導も軌道に乗った（川村 2009：12-5）。

一方、久富は、1960～70年代の東京都の足立一中の実践分析を通じて、教師たちが生徒の「非行」の実態をつかみ出し、その背景に「貧困と家族関係・家庭生活の崩壊があった」（久富 1994：216）ことを認識したと指摘している。教師たちは「日本の教師文化が抱え込んできた弱点、とりわけ教師・生徒関係における教師たちの『尊大さ』と、教師相互の間の『不干渉』の壁、この2つを厳しく問い直すことにな」（久富 1994：220）り、子どもの「荒れ」と、その背景にある子どもの貧困や排除の問題に取り組むために、自身を反省的に捉え返した様子が見てとれる。

さらに、元高校教師の青砥恭（2009）は、高校中退の実態を追うなかで、手がかかる生徒を「早くやめさせたい」教師がいる反面、青砥自身を含め、中退の危機にある生徒に丁寧な寄り添う教師がいることを描いている。これらの知見は、「学校からの排除」である長欠や、「学校における排除」的扱いへの反発とも受け取れる「荒れ」の解決を目指した取り組みが、教師のリフレクションを喚起し、学校における排除のあり方が揺らいでいることを予感させる。

4-4. 学校における包摂の可能性

一方、イギリスでは所得補償を受けている家庭の子ども71%（Ridge 2002=2010：232）が、日本でも少年院生の72.1%（岩田 2008：159）が、学校に好きな先生がいると答えていることも、教師を介した学校への包摂の可能性を示す。この流れをふまえた一つの動向は、「排除に抗する学校」（西田 2012）として紹介される「効果のある学校」「力のある学校」の研究である（鍋島 2003；志水 2005）。社会経済的な不利を抱えた子どもへの支援を可能にする条件の研究が行われている。

また、長谷川裕は、京都の小学校教師の実践を検討するなかで、子どもたちが互いに学び合って獲得される〈学力の社会性〉に着目する。この〈学力の社会性〉は、従来の「学習とは個々人が個別に行うべきものであり、その結果獲得した学力も個人の所有物であり、その獲得程度をめぐって競争や序列づけがなされるのは正当」（長谷川 2010：18）とする学習・学力観とは対照的に、ともに学び合うからこそ、そこで獲得された学力は個人の所有物ではなく共有物であり、そ

の学力を物差しにした序列づけや格差が生じるのはおかしい、という感覚を育てる。子どもの学び合いから、包摂を促すものとなっている。

学校によって排除される貧困層の子どもを、「彼ら」の問題（1節参照）に押し込めてしまうか否かは、貧困層の子どもへの包摂を目指す教師や、それらの実践をまなぐ研究者のリフレキシビリティ（2節参照）にかかっているだろう。（新藤）

5. 貧困と地域

5-1. 人びとの貧困の体験と地域

「貧しければ貧しいほど地理的移動の機会が乏しく、機会があったとしても住む場所を選べない。貧困の現実を規定する排除関係は、ローカルに限定された貧者の生活世界における体験の中から見出される」（西澤 2012：7）。であるならば、人びとに体験された貧困と地域をめぐる問題はどのようにとらえられてきたのだろうか。これまでのところ、階層など社会的地位に関する視点と比べて重視されて来なかったが、近年の研究では地域間格差、地域内の空間的な分離が、階層などの他の社会的要因には還元されない独立の効果を持つことが明らかにされつつある。1980年代後半から1990年代前半にかけて、ちょうどバブル景気とその崩壊、長期不況へと至る流れの中で、「豊かさの底辺」の舞台としてとりあげられた公営住宅をめぐる研究（小澤 1993）は、それまで忘れられがちであった貧困と地域の問題を突きつけるものであった。「豊かさ」ではなく「格差」「貧困」に一定の注目が集まる社会情勢においては、その重要性は高まっていると言えるだろう。ここでは、貧困の空間的な偏りと、それがどのような問題をひき起こすのかという地域と貧困をめぐるテーマについて、特に公営住宅の貧困という点から概観しておこう。

5-2. 貧困層の地域的偏在

まず、確認しておくべきは、経済格差の拡大という社会現象は空間のなかで起こり、空間の中に表現され、地域内部の格差拡大と、一部の地域に貧困が集積することである（橋本 2011：42）。その代表的な例は、1990年代の野宿者の可視化により、貧困と地域の問題に焦点があてられるきっかけとなった寄せ場である。寄せ場では、「都市の『最底辺』にあって階層的・空間的、かつ社会的に隔離された人びと、またはそれらの人びとが集住する地域空間」である「都市下

層」が集積し、経済のグローバリゼーション、世界都市化に中心部のジェントリフィケーションのもとで、日雇労働者、野宿者の滞留、そして外国人労働者の流入という新たな局面を迎え、さらなる階層分化と都市空間の再編が進んでいる（青木 2000）。

こうした空間的な格差と貧困層の集中は、シカゴ学派以降の都市社会学における重要なテーマであった。バージェスによる同心円地帯理論は、同心円状に明瞭な階層ごとの棲み分けが進むセグリゲーション（凝離）のモデルである。類似した人々が集まり、異質な人々が反発して離れていくという居住分化モデルは、明確に自然生態系のアナロジーによるものであり、国家、資本の介入を重視するカステル、ハーヴェイの批判を受けた（橋本 2011）。しかし、その要因がどのようなものであるにせよ、セグリゲーションという現象と貧困層の集積自体は確認されてきたと言っていだらう。実際、日本の大都市圏でも、関東圏で3つの貧困地区類型の存在（山口 2005）が、関西圏ではインナーリング（都心周縁）において「部落、在日、日雇、沖縄というタームを冠にした人々が、空間的には、東部から西南部にかけて、大阪環状線を取りまく三日月状に『現象』した」「マイノリティの三日月地帯」の存在が明らかにされてきた（水内 2005：33）。

このような空間的な特質を持つ貧困層の集積とやや異なるのが、近年の公営住宅をめぐる問題である。そもそも1951年に制定された「公営住宅法」は「住宅に困窮する低所得者」を対象としたものであるが、法制定時は「潜在的な中間層」が想定され、収入分位で80%のカバー率となっていた。しかし、入居の際の収入基準の引き下げにより現在ではカバー率が25%に下がり、高額所得者の厳罰化、民間並み家賃の適用がなされ、同時に高齢者、障害者などの「受け皿」としての性格が強められていく。統計データからも、年収300万未満世帯、母子世帯の比率が上がり、転出率の低下による固定化が進んでいることが明らかにされている（平山 2011：226-7）。こうした公営住宅の状況は、住宅政策によって特定の社会階層を特定の住区や住棟に集積させていく「ハウジング・トラップ」（山口 2005：163）と見ることができる。

5-3. 貧困層の集積による影響

では、このような貧困層の集積が何をもたらすのか。妻木進吾は、これまで貧困のマクロな動態を明らかにする研究も、ホームレス、母子世帯、若者などの

カテゴリーに注目する実証的研究も「貧困や社会的排除の空間的分布を描き出す以上には進んでいない」（妻木 2012：490）とする。1節での議論を踏まえるならば、単に貧困層の地域的集住を「発見する」というだけでは、「誤った関心」に陥りかねないのである。

これに対して妻木は、大阪市の被差別部落調査から、高学歴、安定就業の安定層の転出と、高齢単独世帯・母子世帯、低学歴・低収入の不安定層の流入という「貧困のポンプ」と呼ぶべき状態となっていることを指摘した。さらに、被差別部落の生活文化である、私財の蓄積を図らない「フローの生活」の深化、身近な達成モデルの限定、地域ネットワークの弱体化が進み、貧困層の集積自体がさらなる機会の制約、集積効果を持つことに注意をうながす。ここに、貧困、社会的排除の地域的集積がさらなる貧困、社会的排除の集積・深化のプロセスを見だし、マクロな社会変動・政策、階層・階級文化などに回収されない、固有の生活文化、ネットワークの母体としての地域、独立変数としての地域の重要性を指摘する。ここで見逃さないのは、同和対策事業として地区のほぼ100%を占める公営住宅のあり方が、この動きをさらに補強するものとなっている点である（妻木 2012）。

この公営住宅に焦点を当ててみると、「高齢」「障害」「母子」という「福祉カテゴリー」が増加し、「固定した低所得層」の集住によって、高齢者が多く自治会の運営が困難となり、孤立した場所を形成し、入居者を社会のメインストリームから切り離してしまうことが懸念されている（平山 2011：229）。この問題が少しずつ形を示し始めた1980年代後半から1990年代前半にかけて行われた2つの調査研究は、現在においてもそのメカニズムの析出という点で重要な枠組みを提供している。

竹中英紀（1990）による住宅の所有関係と集合居住とによって相互に区分された世帯の集合である「住宅階層」の調査研究では、公団賃貸・分譲の相対的に階層の高い住民よりも、相対的に階層の低い都営住宅居住者の方が住民の共同志向が強く、自治会を通じた問題処理をする傾向があることを明らかにした。その上で、住宅政策が「地域住民の社会経済的構成における差異を空間的な居住分化（セグリゲーション）」、地域社会における階層間の葛藤・紛争を引き起こしているとする。居住分化という不平等の空間化が「相対的に独自の生活様式を発達させる」ことによって社会階層を実体化させ、「階層間対立の先鋭化」を起こすとい

うのだ（竹中 1990）。

生活様式に注目した竹中の分析に対して、小澤浩明（1993）は、内的な意識、〈表象レベル〉を重視する。ここでは、住民のうわさの分析を通して、住民相互のコミュニケーションレベルの低下を背景としてある種の伝統的な「共同性」が解体し、周囲の住民による〈ステレオタイプ〉的認識が「生活困難層」を「孤立・敵対」に追い込んでいるととらえ、この地域社会に貫いている「孤立・敵対」を強めるプロセスを詳細に示した。空間内部の相互作用、他地域からのラベリング、スティグマ化が生じることにより、単に居住地域に生活困難層が集住していることだけでなく、貧困状態がさらに悪化させられていくメカニズムが明らかにされている。

こうした2つの研究の知見は、公営住宅と貧困の問題がさらに深刻化する2000年代の森千香子（2006）による分析にも息づいている。公営住宅の居住層としてヨーロッパでは若年者が多いが、日本では高齢者、外国人が多いのが特徴である。いずれも自力で民間の住宅を確保することが困難な「住宅弱者」であり、経済的な面での「貧困」という共通性を持っている。こうした貧困層を同じ空間に集中させることで、団地の地域的な活力を奪い、「施設化」してしまう。そして、空間のネガティブなイメージを強め、孤立させる「スティグマ化」が生じ、こうした偏見を地区の人たちが内面化することで、行動、人間関係に否定的な影響を与え、さらに住民を分断、コミュニティづくりを困難とする。こうして、公営住宅における貧困層の集積は、「住民は自己の尊厳を守るために他の住民との差異化を図り、そこから抜け出すことを画策（中略）、社会上昇の可能性を持つ者は「脱出」を目指す」という負のスパイラルを加速し、結果的に困窮を増すというのだ（森 2006：106）。

こうした一連の研究には、単に貧しい人びとが集中して居住していること以上の、低所得で暮らすことの惨めさが増幅される問題、そして貧困地域のスティグマ化が居住者の生活を全分野にわたって悪化させる「スティグマの地理学」としてくられる視点（Lister, 2004=2011：109-11）を読み取ることができる。貧困は、それが集積する地域の社会関係、他の地域との関係という地域的要因によって生み出され、また、増幅されるものなのだ。そして、このメカニズムを意識することで、貧困層の集住地域を「発見」することにより、結果としてその地域のスティグマ化に荷担してし

まうという、貧困研究が陥りがちな問題を乗り越え、貧困研究自体の反省を踏まえた分析へと一歩踏み出すことができるのではないだろうか。（松宮）

まとめにかえて

以上が、私たち「貧困のフィールドワーク研究会」5名による、貧困研究のもう一つのレビューである。「はじめに」でも記したが、5名のメンバー全員はそれぞれの社会調査・フィールドワークに従事してきた経験があり、今もなお従事している。そのような体験と経験からかたちづくられた視角を通して、言及された文献は選ばれている。当然、偏りが大きいことも十分に承知している。だが、調査研究と並走する文献研究もまた必要ではないだろうか。ありとあらゆる文献に目を通し、網羅したレビューは、後学の人たちには貴重な必須文献となるだろう。言わば、あまりにも広い大海原を目前にした航海図、あるいは案内図としての役割を果たすことになるだろう。一方で、調査者・フィールドワーカーがその社会調査やフィールドワークの方法を、後学の人たちのために丁寧に説明していくこともまた必要であろう。同時に、その調査者・フィールドワーカーがその社会調査やフィールドワークにおいて必要である/あった文献を紹介することもあって良いのではないかと思う。本稿は、そのささやかな試みの一つでもある。

不粋かもしれないが、本稿の舞台裏をもう少しだけ明らかにしておこう。本稿の執筆者5名による「貧困のフィールドワーク研究会」は、各々の社会調査・フィールドワークの経験にもとづきながら、これからの貧困調査について議論を重ねている。その成果は、今後次々と発表されていく予定だが、その振り出しとして、過去の社会調査に基づく貧困研究のクリティークをおこなってきた。最初に、久富善之グループによる『豊かさの底辺に生きる——学校システムと弱者の再生産』（1993）を取り上げた。上掲書のクリティーク論文は活字になるのを現在待っている状態である。この論文を書くにあたって、同時並行的に生まれたのが本稿である。本稿を構成する、貧困に関する調査の理念と実際、貧困と若者、貧困と学校、貧困と地域という区分は、実は上掲書が背後にある。数ヶ月後に活字となる上掲書のクリティーク論文と本稿を合わせてお読みいただくと、本稿のわかりづらさも解消されるかもしれない。本稿においては余計な情報だったかもしれないが、文脈の明示のために、あえて蛇足なが

ら付け加えた。

本稿を皮切りに、今後も「貧困のフィールドワーク研究会」として、理論研究と実証研究の両輪を同時に進めていく予定である。まだ詳細を明らかにしませんが、研究会としては非常にユニークな試みをおこなっている。それは、当たり前のように、これまでにはなかなかなかった形態である。本研究会の成果が今後も次々に発表されていくことを予告して、本稿を終えよう。(宮内)

付記

本稿は、JSPS 科研費25590128の助成を受けたものである。

注

- *1 高崎健康福祉大学人間発達学部准教授 *2 愛知県立大学教育福祉学部准教授 *3 群馬大学教育学部准教授
*4 北海道大学大学院教育学研究院准教授 *5 社会理論・動態研究所研究員

文献

- 阿部彩, 2008, 『子どもの貧困——日本の不公平を考える』岩波書店。
新谷周平, 2002, 「ストリートダンスからフリーターへ——進路選択のプロセスと下位文化の影響力」『教育社会学研究』71: 151-70。
青木秀男, 2000, 『現代日本の都市下層』明石書店。
青木紀編, 2003, 『現代日本の「見えない」貧困——生活保護受給母子世帯の現実』明石書店。
——, 2007, 「学校教育における排除と不平等——教育費調達の分析から」福原宏幸編『シリーズ新しい社会政策の課題と挑戦 第1巻 社会的排除/包摂と社会政策』法律文化社, 200-19。
青砥恭, 2009, 『ドキュメント高校中退——いま、貧困が生まれる場所』筑摩書房。
Bauman, Z., 1998, *Work, Consumerism and the New Poor*, Cambridge: Polity Press. (=2008, 伊藤茂訳『新しい貧困——労働, 消費主義, ニュープアー』青土社。)
——, 2000, *Liquid Modernity*, Polity. (=2001, 森田典正訳『リキッド・モダニティ——液状化する社会』大月書店。)
部落解放人権研究所編, 2005, 『排除される若者たち——フリーターと不平等の再生産』解放出版社。
藤本典裕・制度研編, 2009, 『学校から見える子どもの貧困』大月書店。
Gans, H., 1962, *The Urban Villagers*. Free Press. (=2006, 松本康訳『都市の村人たち——イタリア系アメリカ人の階

- 級文化と都市再開発』ハーベスト社。)
——, 1999, *Making Sense of America: Sociological Analyses and Essays*, Rowman & Littlefield Publishers。
後藤道夫, 2009, 『ワーキングプア原論——大転換と若者』花伝社。
長谷川裕, 2010, 「学校の教育実践は、いまどのように貧困と立ち向かえるか——久保齋の実践とその理論から汲みとるもの」『教育目標・評価学会紀要』20: 11-8。
橋本健二, 2011, 『階級都市』筑摩書房。
平山洋介, 2011, 『都市の条件』NTT出版。
本田由紀編, 2007, 『若者の労働と生活世界』大月書店。
乾彰夫編, 2013, 『高卒5年, どう生き, これからどう生きるのか——若者たちが今〈大人になる〉とは』大月書店。
岩田美香, 2008, 「少年非行からみた子どもの貧困と学校」浅井春夫・松本伊智郎・湯浅直美編『子どもの貧困——子ども時代のしあわせ平等のために』明石書店, 154-70。
籠山京, 1953, 「貧困家庭の学童における問題」『教育社会学研究』4: 18-27。
川村光, 2009, 「1970-80年代の学校の『荒れ』を経験した中学校教師のライフヒストリー——教師文化における権威性への注目」『教育社会学研究』85: 5-25。
今和次郎, 1987, 『考現学入門』筑摩書房。
久富善之編, 1993, 『豊かさの底辺に生きる——学校システムと弱者の再生産』青木書店。
——, 1993, 「学校から見えるヴェール一重——教師・学校にとっての生活困難層」久富善之編『豊かさの底辺に生きる——学校システムと弱者の再生産』青木書店, 147-78。
——, 1994, 「戦後史の中の教師文化——それが支え、つなぐもの」稲垣忠彦・久富善之編『日本の教師文化』東京大学出版会, 200-22。
倉石一郎, 2009, 『包摂と排除の教育学——戦後日本社会とマイノリティへの視座』生活書院。
草間八十雄(安岡憲彦編), 2013, 『近代日本の格差と最下層社会』明石書店。
Lister, Ruth, 2004, *Poverty, Polity*. (=2011, 松本伊知朗監訳『貧困とはなにか——概念・言説・ポリティクス』明石書店。)
松原岩五郎, 1988, 『最暗黒の東京』岩波書店。
宮本常一ほか監修, 1995a [1959], 『日本残酷物語1——貧しき人々のむれ』平凡社。
宮本常一ほか監修, 1995b [1959], 『日本残酷物語5——近代の暗黒』平凡社。
宮内洋, 2012, 「貧困と排除の発達心理学序説」『発達心理学研究』23(4): 404-14。

- 三宅和夫, 1957, 「学級における児童の地位と学習場面での反応について——家庭の社会階層別による検討」『教育社会学研究』11: 15-27.
- 水内俊雄, 2005, 「マイノリティ／周縁からみた戦後大阪の空間と社会」『日本都市社会学会年報』23: 32-56.
- 森千香子, 2006, 「『施設化』する公営団地」『現代思想』34(14): 100-8.
- 盛満弥生, 2011, 「学校における貧困の表れとその不可視化——生活保護世帯出身生徒の学校生活を事例に」『教育社会学研究』88: 273-94.
- 鍋島祥郎, 2003, 『効果のある学校——学力不平等を乗り越える教育』解放出版社.
- 中西新太郎・高山智樹, 2009, 『ノンエリート青年の社会空間——働くこと, 生きること, 「大人になる」ということ』大月書店.
- 西田芳正, 2012, 『排除する社会・排除に抗する学校』大阪大学出版会.
- 西村貴直, 2013, 『貧困をどのように捉えるか——H. ガンズの貧困論』春風社.
- 西澤晃彦, 2000, 「都市へのまなざし」町村敬志・西澤晃彦『都市の社会学』有斐閣, 29-56.
- , 2012, 「貧困の都市社会学?」『日本都市社会学会年報』30: 5-14.
- 大澤真平, 2009, 「不平等な若者の自立——貧困研究から見る若者と家族」湯浅誠ほか編『若者と貧困——いま, ここからの希望を』明石書店, 118-38.
- 小澤浩明, 1993, 「地域社会での〈階層化秩序〉と『生活困難層』」久富善之編著『豊かさの底辺を生きる』青木書店, 179-216.
- Pollner, M., 1991, *Left of Ethnomethodology: The Rise and Decline of Radical Reflexivity*, *American Sociological Review*, Vol. 56, 370-80.
- Ridge, T., 2002, *Childhood Poverty and Social Exclusion: From a Child's Perspective*, Policy Press. (=2010, 中村好孝・松田洋介訳『子どもの貧困と社会的排除』桜井書店.)
- 佐藤守, 1957, 「八郎瀧漁村における長欠現象の分析——秋田県南秋田郡庄和町野村部落の場合」『教育社会学研究』11: 79-93.
- 芹沢俊介, 1997, 『現代〈子ども〉暴力論』春秋社.
- 志水宏吉, 2005, 『学力を育てる』岩波書店.
- 杉村宏, 1988, 「貧困と教育をめぐる」『教育』501: 6-18.
- 竹中英紀, 1990, 「ニュータウンの住宅階層問題」倉沢進編著『大都市の共同生活』日本評論社, 103-30.
- 妻木進吾, 2012, 「貧困・社会的排除の地域的出現」『社会学評論』62(4): 489-503.
- 打越正行, 2011a, 「型枠解体屋の民族誌——建築現場における機械的連帯の意義」『KG/GP 社会学批評』別冊, 21-44.
- , 2011b, 「沖縄の暴走族の文化継承過程と〈地元〉——パシリとしての参与観察から」『社会学論考』32: 55-81.
- , 2013, 「沖縄的共同体の外部」龍谷大学人権問題研究委員会編『沖縄における階層格差と人権 中間報告書 (研究代表: 岸政彦)』, 15-34.
- 上間陽子, 2009, 「貧困が見えない学校——競争の時代区分でみる学校から排除される子ども・若者たち」湯浅誠ほか編『若者の希望と社会3 若者と貧困 いま, ここからの希望を』明石書店, 139-59.
- UNICEF Innocenti Research Centre, 2012, *Measuring Child Poverty New League Tables of Child Poverty in the World's Rich Countries*. (<http://www.unicef.or.jp/library/pdf/laborc10.pdf>, 2013.10.27)
- 山口恵子, 2005, 「大都市における貧困の空間分布」岩田正美・西澤晃彦編著『貧困と社会的排除』ミネルヴァ書房, 147-67.
- 横山源之助, 1985, 『日本の下層社会』岩波書店.
- 與那覇里子・新谷周平, 2008, 「弱くなる『ギャル』——『強めの鎧』と『がんばる』という適応」広田照幸編著『若者文化をどうみるか?——日本社会の具体的変動の中に若者文化を定位する』アドバンテージサーバー, 150-76.
- 好井裕明, 1994, 「螺旋運動としてのエスノメソドロジー——“生きられたフィールドワーク”のラディカルな方法として」札幌学院大学社会情報学部編『社会情報』, 91-103 (好井裕明, 1999, 『批判的エスノメソドロジーの語り——差別の日常を読み解く』新曜社. に後に所収).
- 湯浅誠, 2008, 『反貧困——「すべり台社会」からの脱出』岩波書店.
- ・上間陽子・富樫匡孝・仁平典宏編, 2009, 『若者と貧困——いま, ここからの希望を』明石書店.